

時代を讀む

渡辺 利夫



九月初旬、タイのいくつかの都市を回ってきた。政治的不安の報道がしきりだが、経済の方は大変な活況を呈しており、その要因が日本企業の集中的投資にあることが強く印象づけられた。

昨年、日本からタイへの海外直接投資は、前年比、件数で48%、金額で70%という顕著な伸びであった。今年に入ってからの数値は、まだ得られないが、日本貿易振興機構(JETRO)バンコクセンターによれば、一〜六月期において増勢は一段と強まっているという。タイへの直接投資に占める日本企業の比率は、昨年は45%であったが、今年の前半期には56%にまで

深刻化する日本経済の空洞化

出ている。私の目を惹いたのは、日本の中小零細企業の進出である。超円高が日本国内

で、日本の中小零細企業の進出である。超円高が日本国内

を果たしたという企業もあった。この円高では生産すればするほど、輸出すればするほど赤字が嵩む「原発稼働数の減少は不可避のようだ。来夏の生産計画が立てられない」。中小零細企業の経営に携わる日本人が口を揃えていた

語りの経営者さえた。日本の製造業の強靱性は、精緻に仕立てられた国内「サプライチェーン」(部品供給網)にある。大企業の周辺には第一次サプライヤー(仕入れ先)が位置し、さらにその周辺を第二次、第三次のサプライヤーが囲んで形成される部品供給網を擁して、日本の電機や自動車の国際競争力にはかつて確たるものがあつた。電機では、家電にみられるように、もはや国内サプライチェーンは消失してしまつたかに見える。自動車という日本の所得と雇用を支える一大サプライチェーンさえ崩れつつあるのかもしれない。

タイ経済が日本の企業進出によって活性化しているのに、は誇らしい気分がしないでもないが、その分だけ、日本経済の「空洞化」が深刻の度を増していると考えねばなるまい。複雑な気分を拭えないままにバンコクを後にした。

及んだとも聞かされた。

都市周辺部には工場団地が次々と造成され、外資系企業の導入を求めて優遇条件を競い合っていた。「アジアのデトロイト」と呼ばれるタイ東部のラヨーン県やチョンブリー県に築かれた自動車の産業集積が、その厚みを一層増し

での輸出生産を困難に追い込み、福島第一原発事故後の電力需給の逼迫が事業計画の見通しを不透明なものとした。この二つの要因が、新たに中小零細企業をしてタイへの進出を決断せしめた理由だとい

ことである。海外事業の経験もなく不安は尽きないが、日本の国内工場を稼働させ雇用を維持するには、海外進出しか道はなかったと述懐する経営者が少なくなかつた。海外進出というポジティブなイメージは感じられない。日本から「締め出された」といった

企業の海外進出は、もはやこれを不可避だと判断したのである。いくつかの県や都区

タイ経済が日本の企業進出によって活性化しているのに、は誇らしい気分がしないでもないが、その分だけ、日本経済の「空洞化」が深刻の度を増していると考えねばなるまい。複雑な気分を拭えないままにバンコクを後にした。

集積が、その厚みを一層増し

係を絶って、敢えてタイ進出

を果たしたという企業もあつた。

この円高では生産すればするほど、輸出すればするほど赤字が嵩む「原発稼働数の減少は不可避のようだ。来夏の生産計画が立てられない」。中小零細企業の経営に携わる日本人が口を揃えていた

語りの経営者さえた。日本の製造業の強靱性は、精緻に仕立てられた国内「サプライチェーン」(部品供給網)にある。大企業の周辺には第一次サプライヤー(仕入れ先)が位置し、さらにその周辺を第二次、第三次のサプライヤーが囲んで形成される部品供給網を擁して、日本の電機や自動車の国際競争力にはかつて確たるものがあつた。電機では、家電にみられるように、もはや国内サプライチェーンは消失してしまつたかに見える。自動車という日本の所得と雇用を支える一大サプライチェーンさえ崩れつつあるのかもしれない。

タイ経済が日本の企業進出によって活性化しているのに、は誇らしい気分がしないでもないが、その分だけ、日本経済の「空洞化」が深刻の度を増していると考えねばなるまい。複雑な気分を拭えないままにバンコクを後にした。

(拓殖大学学長)